

解題

呂微「民俗学のデカルト的省察—高丙中『民俗文化と民俗生活』をめぐる論考—」

西村 真志葉

NISHIMURA Mashiba

本稿は、呂微『民俗学的笛卡爾沈思—高丙中「民俗文化與民俗生活」申論—』の和訳である。2010年『民俗研究』第1号に短縮した形で掲載された後、2012年『中国民俗学』第一卷(広西師範大学出版社)において全文掲載された。今回和訳したのは後者である。

本稿を初めて目にした読者は戸惑ったに違いない、これははたして民俗学の論文なのかと。文中語られる「民俗学」とその語り手「民俗学者呂微」が、当たり前前に想起される「民俗学」や「民俗学者」とあまりにかけ離れて見えるためである。

呂微氏について言えば、中国民俗学内においてもたしかに異質な存在である。著名な詩人呂劍氏を父に持ち、時代に翻弄されながら育った呂氏は、文化大革命終息後の1977年に西北大学歴史学科に入学、中国教育史上最高の入試倍率で選抜された年齢差15歳以上の学生がひしめくクラス(俗にいう「77級」)で、哲学談義やディベートに日々明け暮れた。当時のクラスメイトで後に『民間文学』誌の編集者となる蔡大成氏の影響もあり、卒業論文のテーマは神話を選択、卒業後も西安や北京で働きながら、清貧のなか神話研究を続けた。やがて蔡氏の紹介を通じて知り合った神話学者劉錫誠、馬昌儀夫妻の格別な計らいによって、実父の知己も多い中国社会科学院文学研究所民間文学室に就職、室長を歴任した。こうした呂微氏の経歴には、同時期の民俗学者に共通する「北京師範大学」や「鐘敬文」というキーワードが出てこない。呂微氏は鐘氏の弟子が大半を占める中国民俗学の中核において、異質なバックグラウンドを持つ少数派なのである。

だがもちろん、こうした異質性は氏の論考が民俗学のものであるかという問いを正当化する根拠にはなり得ない。むしろこの問いの根底に、「中国の民俗学≒日本の民俗学」といった安易な思い込みがないか自問すべきだろう。中国民俗学という学問をあるがままに見るならば、むしろ本稿以上に今現在の中国民俗学を象徴する論文はないといっても過言ではない。

中国民俗学をユニークなものとして特徴づける核心的概念の一つが、生活世界である。『日常と文化』第2号収録の訳者解題において、この概念を最初に中国民俗学に導入したのが本稿の副題にある高丙中氏の博士学位論文であることを紹介し、中国での高い評価を伝えた。だが実は、この評価は発表当初からのものではない。高氏の論文はテーマ報告会の段階から民俗学の博士学位論文に相応しくないと問題視され、これを高氏は論文を二分し前半を理論研究、後半をフィールドワークに基づく実証研究とするという苦肉の策で切り抜け、最終的に時間不足などを理由に前半部分のみをもって完成稿としたという経緯がある。当時の中国民俗学は、マルクスの階級理論や直線的な発達史観、レーニンの反映論、毛沢東の「大衆路線」や「实事求是」などの限界を超えられずにいた。「民」とは即ち虐げられてきた労働階級であり、文化が歴史の名残や思想の断片といっ

た「客観的事実」を反映するという前提の下、労働階級が社会的実践を通じて発展させてきた歴史や思想をフィールド資料から科学的に描くことで、新たな社会主義文化政策に貢献せんとする傾向が強かったのである。そうした中、高氏の理論研究が受け入れられる余地は少なかった。ましてや高氏が称賛するサムナーは、政府主導の社会改革に反対し、共産主義と社会主義を敵視する自由主義者である。高氏がその先に見つめていた新しい中国民俗学を、マルクス世代が把握しきれなかったことは想像に難くない。事実、出版された高氏の論文に序文を寄せた鐘敬文氏は、高氏の英語力と学際的なアプローチを高く評価しながらも、論文の内容には深く触れていない。

その後も冷遇され続けた高氏の博士論文にはじめて光を当てたのが、呂微氏だった。氏は早くから様々な場でこの論文に言及しており、周囲の反応に業を煮やすかのように本稿を発表した。その内容はタイトルから想像されるような書評ではない。「超訳本」あるいは「補完の書」と呼ぶ方がよりの確だろう。

たとえば、高氏は原著で、民俗学が論理的に十分な「民」と「俗」を対象として有することをいかに保証するかを論じ、ここから民俗学が独立した完全な領域でディシプリンとして存在し得る可能性を描いている。これに対し、呂微氏は研究対象を確保することで民俗学を救えたとしても、民俗学が人間そのものの存在と無関係ならばそもそも無意味であり、民俗学が人間の自己存在にとって有意義な学問であるからこそ、救うに値するのだと考える。民俗学者がその研究対象から見出すのは民俗学というディシプリンの問題意識によって照らし出される人間の存在価値であり、「人間の存在価値を照らし出すこと」にこそ、このディシプリンの存在意義がある。呂微氏は、高氏が人間の存在価値と意義を守るという民俗学の根本的な課題に突き動かされながら、照らし出されるディシプリンの正当性を擁護するために概念と概念化された論理を導入したのだとし、概念や論理の導入以上に、これらを通じて最終的に人間の主体的な存在意義と価値が示された点をより高く評価している。

また、高氏はサムナーとダンスの論考を翻訳して原著に付録として収録したが、呂微氏はこれを詳細に分析し、とくに高氏が心酔するサムナー思想の問題点を指摘している。その一部は一介の民俗学者には手厳しすぎるものであり、徳範をめぐる哲学批判に至ってはもはやサムナーの問題を超越している印象も受ける。だが呂微氏は高氏が支柱とする理論をより丁寧な整理、分析したうえで、あくまで高氏自身のまなざしが「サムナーを生活に最大の関心を寄せる民俗生活論者へ変化」させていることを指摘し、高氏の論文が理論の応用以上の価値を持つことに強く自覚を促している。

さらに、呂微氏は高氏の「俗を以て民を論じる」という経験的・実証的手法が民俗学の社会科学化という新たなパラダイムを切り開いたと評価する一方で、この社会科学化した方法論を超越せずして、民俗学が人間自身とその自由な生活について思考することはできない、と指摘する。サムナーの総体的研究とフッサールの生活世界を安易に結びつけることに警鐘を鳴らしているともいえるが、実はここに親しい両氏が現在に至るまで意見を分かち論点が潜んでいる。それは民俗学が人文学か、社会科学かという点である。一貫して前者の立場を堅持する呂微氏は、民俗学の社会科学化を志向する高氏と対峙するのではなく、逆になぜ社会科学化した手法で「個の主体性」を発見した高氏が、突如フッサールの生活世界へ飛躍したのかを問うている。そしてこの飛躍によって、社会科学化した民俗学が生活世界という概念を導入することで、人間の自由を存在論的に弁護し、「生活世界の救済」、「日常生活の防衛」、「公民社会の建設」に寄与する人文学として自らを再定義することを理論的に可能にしているとして、妥協点を提示した。

本稿のこうした見解からも窺い知れるように、呂微氏が従事するのは「民俗学が民俗学として

成立するための本質学」である。その醍醐味は、視点も対象も手法も異なる分散的な民俗学研究に一つのまとまりを見出す点にあるのだが、その中心に生活世界概念を据える氏自身が一つの求心力となっていることが、現在のユニークな中国民俗学を支えていると言えよう。もちろん、個性豊かな研究を結びつけるのは容易なことではない。本稿もそうであるように、呂微氏はつねに他者の研究を尊重しながら、作者が自覚しているかどうかに関わらず、民俗学の研究として「人間の自己存在の価値を照らし出す」ことに寄与している点を見出し、評価する。たとえ相反する主義主張であっても同様で、それを自分が理解、受容できるまで解きほぐし、また他者の視点から自らの主張を疑問視して自問自答の中で共通理解の可能性を模索する。このため、その記述はしばしば紆余曲折し、一見主張が二転三転しているかのような錯覚をすらもたらす。この記述スタイルこそが呂微氏の論考に特有な難解さの元凶なのだが、氏の論文が難解すぎると多くの中国民俗学者が嘆く一方で、氏が誰よりも他者を理解しようと努めているのは皮肉なことである。

最後になったが、本稿のタイトルには「上」の文字が加えられている。これは執筆当初上下2部作で構想されていたためだが、残念ながら下巻はまだ実現していない。ただ、2007年頃の未発表原稿には、その構想が目次に示されている。それによると、下巻のタイトルは「生活世界の救済」であり、本稿の第3節に続く第4節、第5節でそれぞれ「『生活世界』の命題が民俗学にもたらす示唆」と「『民俗文化と民俗生活』の学術的実践」が論じられ、エピローグ「『最高善』をディシプリンの理想とする民俗学」で結ばれている。このうち第5節の内容については、その後発表された実践を巡る論考の中である程度言及されたと思われるが、そのためなのだろうか、2015年出版の『民俗学、この偉大なディシプリン—内省から実践科学への歴史及び論理に関する研究—』（中国社会科学出版社）に本稿が再収録された際には、タイトルから「上」の文字が消えている。だが果たして、当初のエピローグに象徴されるような、民俗学を現代の知の「良心」として位置づける呂微氏らしい思想は十分に語り尽されただろうか。退職後、表立った活動を控えているようにも見える呂微氏だが、本稿に続く下巻の実現を改めて期待したい。本稿の日本での発表がわずかでもその背中を押す力になれば幸いである。

